

Title	中井さんのこと
Sub Title	On Professor Nakai
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.51, No.4 (1982. 3) ,p.115(539)- 116(540)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820300-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中井さんのこと

清 水 潤 三

巧みに指導されたわけで、今さらのよう畏敬の念を深くする。そして中井さんが昭和十三年に卒業して塾を去り、私が次年卒業と同時に普通部の教師になったわけであるが、彼は軍事教練をさぼってばかりいたのに、馬鹿正直の私が眞面目にやり過ぎたせいか、教員生活二年で私の方には赤紙が配達され、まる四年に亘って中国大陆で軍服を着せられ艱難辛苦する羽目に陥った。

幼稚舎から普通部に進んで間もなく、中井信彦さんに会い、すぐ友達になることができた。昭和四年のことである。彼は早生まれなので二年生、そのまま大学予科本科を通じていろいろと教示や指導を受け、去年の春停年退職されるまでお世話になった。お蔭で今日の私があるのだと常々感謝している。

幼少の頃から人一倍苦労されたということで、初対面の時から既にタダの風ではなかった。「普通部史学」という三号雑誌を本誌に似せた体裁で刊行したのも彼の仕業というべきであるが、この印刷物の存在を知る人も今では皆無に近い。その頃から既に老成していく当方は劣等感にさいなまれたものだ。ところが『人間万事なんとかの馬』で、文学部の予科に進んだ後も、一年先にいろいろと教えてくれるのを頼りにしていたが、松本信広先生に私淑して彼が民族学の領域に深入りしてゆくのに反し、当方は同じ松本先生の許にあっても、日吉のキャンパスの内外で弥生時代の集落や大小の古墳が発見されるのに魅せられて考古学への道を歩むことになつて、運よく学問への志向を失わずにすんだのであった。松本先生はこの少し変り種の二人をそれぐの途へと

そして私は文学部の助手に復職して授業も担当するようになり、彼もしばらくすると文学部の教員の仲間として久方ぶりに三田の山に戻つてきてくれた。私にとっては正に感激にたえなかつたが、去年の春彼が停年になるまで、長い間に亘つて示教を受けつつ楽しい歳月を過ごすことができた。やはり深い縁だとつくづく思うことである。

中井さんは塾に戻つた当初は文学部の社会学専攻に所属して、戦後古い先生が減つて弱体化していた此の学問の再興に努力された。そして若い俊秀が続出するのを見定めてから国史学専攻に移つてようやく私の仲間に戻つてきてくれたわけである。

迂闊にも私ははじめ彼が社会学専攻に戻つてきたことに對して不満を覚えた。国史に来て貰いたかったのである。しかし、普通部以来の友人の称したにしては、とんだお笑い草であった。中井さんは学生時代から『中井氏』と呼ばれていたが、それも單なるアダナではなく、松本信広先生の民族学から柳田国男、折口信夫

のそれに至るまで正確に攝取し、歴史学では幸田成友を自家薬籠中のものとし、経済学に關しては野村兼太郎の特別な指導を受けなど、いわゆる右から左まで學問の幅をひろげ、また史料の批判と駆使に關して特異な資質を備えていたからに外ならぬ。さらに年月が流れた後においても、改めて彼を師と仰ぎ、正しく評価すると共に彼の軌跡を歩む人びとが輩出することを信じて疑わない。

彼がいわゆる早生れであるために、それも僅か二カ月余の違いで去年定年を迎えてしまい、私も現役の仕事を終え一ヶ月ほどで二人とも三田から姿を消してゆくわけで、長い長い月日が過ぎたとの感慨に堪えない。

ただ終りに附言するトすれば、彼には広く知られた『中井史学』があり、私には『清水考古学』といわれるようなものがないという冷厳な事実であろう。今あらためて中井氏の加齢析つて止まぬ次第である。

最後に敢えて『中井氏』と書いたのは彼の老成ぶりに因んで、普通部生としては考えられないような敬称を當時からわれわれが使っていたためであることを敢て記しておきたい。